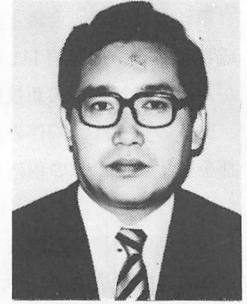


第6回 LNG国際会議について

猪 俣 誠*



1. 会議をふりかえって

第6回LNG（液化天然ガス）国際会議は、この4月、桜の花が満開の京都（会場：国立京都国際会館）において、世界の42ヶ国から2,229名の参加を得て盛大に開催された。

開会式は、皇太子殿下、皇太子妃殿下のご臨席を賜わり、来賓として佐々木通産大臣、林田京都府知事、船橋京都市長をお迎えして行れた。



開会式会場

A. R. カーン運営委員会委員長の開会宣言のあと、議長であるE. A. ジョルジス国際ガス連盟会長、安西浩日本LNG会議議長のあいさつに続いて、皇太子殿下がおことばを述べられた、引き続き、来賓のあいさつのもと安西浩日本LNG会議議長、P. ハルヨノ・プラミナ総裁、M. W. H. ピーブル、インターナショナルガス取締役がそれぞれの立場から基調演説を行い、4日間の会議に入った。

この会議の第1の特徴は、参加国、参加者数がこれまでの会議の中で最高を数え、特に産ガス国（アルジェリア、オーストラリア、ブルネイ、インドネシア、イラン、クウェート、マレーシア、カタール、アラブ首長国連邦、サウジアラビアなど）から多くの参加を

得たことである。前回のLNG-5（デュッセルドルフ、39ヶ国、1,600人参加）に比し、地理的に恵まれない極東の国日本であったにもかかわらず、それを上まわる参加を得たことはLNGに対する関心が世界的に高まっていることを率直に物語っているといえる。

第2の特徴は、LNGの価格動向に参加者の関心が集まったことである。価格論議は、安西浩日本LNG会議議長が基調演説において触れられた。産・消両国の相互理解と強固な信頼関係が不可欠であるとの観点から行なわれたこの演説で、とくに次のように強調された。

「LNGプロジェクトの経緯を考えずして、高騰した原油価格のレベルまでLNG価格を引き上げることは不合理である。プロジェクトが円滑に運営されるためには、供給者と需要者の間に十分な相互理解と強固な信頼関係が不可欠であり、いたづらに自らの立場のみに拘泥し、自己主張を繰り返すところにはプロジェクトは成立し得ない。長期的観点に立って双方が公正かつ妥当な利益を享受し得る体系の構築が必要であり、これが原油に代るエネルギーとしてのLNGの発展のための重要なポイントである。」

これに対し、産ガス国側はハルヨノ・プラミナ総裁の基調演説やカタールのジェイダ石油総裁（前OPEC事務局長）の記者会見において、原油等価にプレミアムの上乗せを要求することを言及するなど、生産国としての主張を展開した。各セッションの場でもこうした価格論議が双方から繰り返され、京都の会議は今までにない新たな盛り上がりを見せた。

第3の特徴は、高水準を誇るわが国のLNG技術を十分に世界各国の方々に紹介できたことである。

会議終了後、技術見学旅行が2日間行われ、わが国6ヶ所のLNG基地（袖ヶ浦、根岸、知多、泉北、姫路、北九州の各基地）をそれぞれ訪れ、壮大な地上式、地下式貯槽群あるいは冷熱利用技術を実際に見ただくことによって、日本のLNG技術を知る上で大いに役立ったことである。

* 日本瓦斯協会、技術開発室室長

第4の特徴は、会議と併催したLNG技術展示会の成功である。19ヶ国111社の出展物には1500人以上が入場、LNGの最新技術が紹介された。

第5の特徴は、同伴のご婦人方に日本のいしえの都を散策し、日本の風俗に実際に触れていただき、わが国を理解していただくのに大いに役立ったことである。会期中14種類の婦人プログラムが用意され、特に京都の建築や庭園の見学、伊勢・鳥羽・奈良の1日旅行は大変好評であった。

2. LNG—6開催までの経過

LNG国際会議は、1968年4月にシカゴでガス技術研究所（Institute of Gas Technology, 略称IGT）主催のもとに初めて開催されたが、その内容が豊富であったことから、各国の関係者に大きな反響を呼んだ。その後、世界のエネルギー需給の中において天然ガスの重要性に関する認識が一段と高まり、特に生産国と消費国を結ぶチェーンとしてのLNG海上輸送の役割が急速にクローズアップされて来た。その間LNGをテーマとする国際会議を継続的に開催しようという動きが起り、LNGに関係の深い国際ガス連盟（International Institute Gas Union, 略称IGU）と国際冷凍協会（International Institute of Refrigeration, 略称IIR）の二つの国際機関も主催者に加わり、第2回は1970年10月にパリで開催した。以後第3回は1972年9月ワシントン、第4回は1974年6月アルジェ、第5回は1977年8月デュッセルドルフというように2～3年の間隔で世界各地で開催されてきた。

この国際会議の主目的は、天然ガスの開発、液化、LNGの輸送、貯蔵、利用方法など広汎な技術分野にわたって、世界各国の専門家が研究の成果を発表し、討論を通じて、科学的、技術的知識の交流とその向上を図ることとされているが、同時に広く世界のエネルギー需給問題、開発金融問題なども取り上げ、LNGの開発、利用に関する国際協力の促進にも大きく貢献する会議となってきた。

今回の第6回LNG国際会議の開催については、昭和52年に、前述の会議主催3団体（IGT、IGU、IIR）から、LNGを最も多く消費している日本で開催することが望ましいという強い要請があり、これに応じて国内のLNGに関係の深い各団体、すなわち、電気事業連合会、鉄鋼連盟、天然ガス鉱業会、冷凍協

会、造船工業会、産業機械工業会、それに日本瓦斯協会などが中心となり、エネルギー問題を研究している学界の協力をいただいて、この要請を受けるべき組織として同年12月に「日本LNG会議」を結成した。

この「日本LNG会議」は名誉議長に経団連会長の土光敏夫氏、議長に日本瓦斯協会会長の安西浩氏をはじめとする。官庁、学界、産業界からの代表の方々89人をもって構成され、以来、本年4月の開催に向けて精力的に準備活動を展開してきた。

3. 会議の概要

会議は、テクニカルセッション（論文発表）とワークショップセッション（討論）の二つに分かれ、テクニカルセッションは開会式終了後4日間、ワークショップセッションは次の日から3日間、各々次のテーマで進められた。

・テクニカルセッション

1. LNGと世界のエネルギー供給
2. LNG技術の発展
3. LNGの輸送と取り扱い
4. LNG貿易における法制問題と金融問題

・ワークショップセッション

1. LNGに起因する契約上の問題
2. LNGタンカーの安全と保守管理
3. 大型液化プラントの効率的操業
4. 大型貯蔵設備の安全操業

5. 洋上LNG設備対陸上LNG設備

テクニカルセッションでは10ヶ国から46編の論文が発表された。このうち、日本からの論文は、アメリカの12編を凌ぐ13編と最も多く、これは前回までに採用されたわが国の論文が3～5編であったのに比べ、著しく増加しており、世界最大のLNG消費国であるわが国のLNG技術が国際的に高く評価されてきたことを示している。

ワークショップセッションは各テーマともパネラー方式で進められ、基調演説で触れられた価格動向の問題、LNG技術、法別、金融問題など幅広く、活発な議論が展開され、どのセッションも会場が狭くなる程多くの人が参加され、盛会であった。特に、生産国と消費国の方々が一同に会し、大いに議論が行われたことは相互理解を深める上で、大きな意義があった。

4. 第6回LNG会議の意義

現在、世界各国は石油情勢の逼迫化、価格の高騰化に伴い、省エネルギーに努めるとともに、石油代替エネルギーの開発に取り組んでいるところである。このような情勢の中で、クリーンエネルギーであるLNGは代替エネルギーの一つの柱として注目され、ますます脚光を浴びる状況にある。このような時に、LNGに関する世界の専門家がわが国に集まり、幅広く意見

交換ができたことは誠に時宜を得たことであり、特にLNGの生産国と消費国とが一堂に会し、価格問題を含めてコミュニケーションを深めることができたことは何よりも有意義であったといえよう。

また、世界一のLNG消費国であるわが国の実情やわが国の誇るLNG技術（LNGの冷熱利用技術や大規模地下式貯槽技術など）を実際に紹介できたことは大きなプラスであったと考える。

このように、第6回LNG国際会議は時宜を得た実り多い会議であったといえよう。

【お知らせ】

第17回 情報科学技術研究集会開催について

〔内 容〕

- ・特別講演「科学技術情報調査と材料開発」

…………… 松下電器産業(株)取締役・技術本部長 早 川 茂

- ・パネルディスカッション

「これからの情報マンはいかにあるべきか」

—その役割・課題・対応策—

- ・研究発表……………32件

〔会 期〕 昭和55年10月23日(木)～24日(金)

〔会 場〕 大阪科学技術センター

〔参加費〕 7000円(予稿集代を含む)

〔主 催〕 日本科学技術情報センター

〔申込先〕 日本科学技術情報センター大阪支所 TEL 06-445-6001

大阪市西区靱本町1-8-4

大阪科学技術センター内